

〈書評〉

望月郁子著

『仏教界に辞書は在ったか』

——古字書の新研究

小松 英雄

1、空海『篆隸万象名義』や昌住『新撰字鏡』、『類聚名義抄』(原撰本系/改編本系)など、僧侶の手になる字書は日本における〈辞書史〉の中枢をなしており、巨視的にも微視的にも多くの研究が累積されている。現に、この著者には、『類聚名義抄四種声点付和訓集成』という労作があり、また、『類聚名義抄の文献学的研究』(第一回関根賞受賞)と題する大著もある。

そういう業績をもつ著者が、このようなタイトルの著書を公にすることに、多くの研究者は戸惑いをおぼえるかもしれない。従来の常識に立脚するかぎり、「在ったか」という問いかけには、「在った」としか答えようがないからである。ということは、とりもなおさず、本書が、従来の確立された共通理解を打破して新たな共通理解を築きあげようとする意欲的著作であることを意味している。

主題に「辞書」とあり、副題に「字書」とあることに注目したい。中国には辞書(dictionary)がなく、字書、韻書、類書に分かれて発達したとされているが、著者は、「言語理解の為」に編纂されたものを「辞書」とよび、目的がそれと異なれば、外形は字書であっても

「辞書」とはみなしていない。したがって、このタイトルは、著者が、『篆隸万象名義』や『新撰字鏡』、『類聚名義抄』、世尊寺本『字鏡』などを「言語理解の為」に編纂されたとは認めていないことを含意している。「言語理解の為に」とは、書記テキストを読む場合に検索するために、という意味である。すべての字書は文字を検索する目的で編纂されたという常識を著者は否定している。

古辞書に深く関わっていない評者が、あえてこの一文を草するのは、本書によって提起された問題がたいへんおもしろいと考えからである。本書の内容は必ずしも取り付きやすいので、以下には、評者なりの理解における導入を試みる。問題の重要性をより多くの研究者に認識してほしいと願ってのことである。

2、本書は、著者による一連の研究を基礎にして立論されているので、その意図や意義を正しく理解するためには、ここに至るまでの、この領域における著者の研究をたどってみる必要がある。

一九五〇年代まで、『類聚名義抄』の名で知られていたのは、観智院本や高山寺本など、現在では改編本系とよばれているテキストであった。金田一春彦は、その和訓に加えられた声点を資料として平安末期のアクセント体系を再構築した。それは、日本語アクセント史研究の金字塔的業績であったが、一九五〇年代になって、原撰本系とみなされる図書寮本が複製刊行され、観智院本などと声点の体系が異なることが判明したために、日本語アクセント史の再構築が必要になった。『類聚名義抄四種声点付和訓集成』は、そういう立場からの資料整備であった。

丹念に作成されたこの索引は、信憑性のきわめて高いものであったが、書記テキストを最初から言語資料とみなしている点において、他の多くの国語史研究者による作業と選ぶところがなかった。しかし、「付論」として添えられた「声点の認定をめぐる二三の問題」に、著者のその後の研究の方向が、すなわち、文献学的研究の方向が確実に指向されている。

書記テキストを対象とする研究は、当該テキストの作成された目的を明確に把握したうえでなされなければならない。対象が字書であれば、その目的によって、内容が直接に左右される。『類聚名義抄』は、十二世紀初頭に編纂され、その後、抜本的に改編されているが、書名はそのまま継承されている。原撰本と改編本との関係はどのように把握すべきかを棚上げして、というよりも、そういう大きな問題に気づきもせずに、たとえば、和訓の仮名に加えられた声点を、平安末期のアクセントを知るための資料として、利用してきた先行研究の短絡を、著者は、索引作成の過程で認識した。そういう問題を徹底的に解明しようとしたのが『類聚名義抄の文献学的研究』であった。

文献学的研究では、書記テキストを、あらかじめ設定し研究目的のための資料とみなす功利的立場をとらず、書記テキストに語らせ、その声に耳を傾けようとする。そういう接近を試みた結果、著者が直面したのは、はたして、これらの字書が、「読むための辞書」として編纂されたものかどうかという疑問であった。それが、「仏教界に辞書はあったか」という否定的な問いかけである。

国語史研究の定石に従って着手された研究は著者を文献学的接近

に導き、ついに研究の原点に到達させたと言ってよいであろう。

3、本書の構成は、つぎのとおりである。

はじめに 平安時代の辞書

第一章 文字に対する信仰と字書

——平安鎌倉仏教界で成立した字書研究の原点——

第二章 東大寺と『篆隸万象名義』

第三章 図書寮本『類聚名義抄』の成立と仏教界の史的背景

第四章 字書発達史上の世尊寺本『字鏡』

——心篇基礎字彙とその注文の検討——

第五章 世尊寺本『字鏡』（心篇）の標出漢字の字形について

——世尊寺本『字鏡』によって漢籍・仏典は読めたか——

第六章 平安時代・鎌倉初期の〈読むための辞書〉の再検討

第七章 『新撰字鏡』における「東倭音訓」

——昌住が大切にしたもの——

第八章 観智院本『類聚名義抄』の宗教上のねらい

——図書寮本対応和訓の配列順序をてがかりに——

いずれも、一九九三年から一九九八年にかけて公表された論文に加筆したものである。「はじめに」は、本書における著者のバイアスを知るうえで重要である。

「はじめに」以下、各章の最初に短い「要旨」があり、第二章以下には詳しい「問題提起」があるので、解明すべき問題を念頭に置いたうえで読み進むことができる。著者の主張を的確に把握させるうえで効果的であるし、読者にとっては親切な配慮である。

全体にわたって取り上げることが不可能なので、以下には、第八章を中心に、問題の在処を探ることにする。

4、本書で取り上げられている字書については、編纂者や成立時期の推定、出典の解明などが詳細になされてきたし、また、言語資料としても利用されてもきたが、編纂の目的が特に問題にされることなくあったのは、字書とは文字を検索するための道具であるという前提をだれも疑わなかったためである。

文字を検索するための道具なら、検索しやすいように工夫されているのが当然であるが、実際に検索してみると、『類聚名義抄』には、そういう配慮の跡が認められない。

図書寮本『類聚名義抄』の最初の項目「水」を例にとるなら、まず、『篆隸万象名義』から「尸癸反」という反切が引用され、そのあとに、中算『法華経釈文』、顧野王『玉篇』、そして、蔣飭『切韻』からの引用が続いているが、和訓はない。〈俗〉(secular)よりも法相宗の〈僧〉(religious)の立場が絶対的に優先されており、すくなくとも一次的には「言語理解」が指向されていない。一方、それに対応する観智院本『類聚名義抄』の項目には、「尸癸反」が出典なしで示されたあとに、二つの和訓「ミツ、カハ」があり、そのあとに、「和スイ」という形式で和音が添えられている。「ミツ」には声点があり、「カハ」には声点がない。この項目の一部のようにみせかけた「月水」の項目にも注目すべき相違が指摘できる。

『類聚名義抄』という名称を共有しながら、両者の間にこのように大きな相違がある理由を説明することなしに、原撰本と改編本、す

なわち、現今で言うなら、初版と改訂版というたぐいの単純な関係で捉えるべきではないとする著者の主張には根拠がある。

図書寮本にせよ観智院本にせよ、効率的な検索を一次的に指向していないとしたら、編纂の、そして、改編の、ほんとうの目的はどのようなところにあったのか。著者は、それを正面から問題にして回答を与えようとしている。

5、「命題は、真実であろうことよりも、おそらくありそうなことのほうがいっそう大切だ。(略)真である命題は偽である命題よりも、とかくおもしろくありがちだ」と、哲学者でもあり数学者でもあったホワイトヘッドは言っている(Alfred N. WHITEHEAD: *Adventures of Ideas*. The Free Press, 1933 評者意識)。どの書記テクストにどういうことが記されているかを指摘するだけなら安全であるが、安全指向から研究の進歩は期待できない。解釈に踏み込めば誤りをおかす危険がつけねに付きまとうが、その危険をおかさなければ事実の奥に潜む真実に迫ることはできない。

疑問形で提示された本書の主題はたいへんおもしろい。ただし、ホワイトヘッドも、おもしろい命題であれば必ず真であるとは言っていない。我々は、慎重に著者の論述を吟味する必要がある。

このような考察から導かれる帰結は、つねに灰色である。本書のように、まったく新しい観点を導入した考察が、最初から純白ではありえない。灰色であるとは、黒に近くても白の要素が含まれており、限りなく白に近くても黒の要素が混在しているという意味である。本書で導かれた帰結について灰色のありかたを査定し、洗練の

可能性を探るべきである。

6、漢訳仏典の内容を理解するためには『一切経音義』があり、日本で編纂された音義もあった。また、原本『玉篇』や『大広益会玉篇』など、中国で編纂された字書も現に利用されている。『類聚名義抄』が、それらを利用することのできない、学力の低い僧侶たちのために編纂されたとは考えがたい。

先に言及した「水」字の例をとるなら、『篆隸万象名義』は『玉篇』を簡略化した字書であるから、当然ながら、反切は『玉篇』と同じであるにもかかわらず、空海の著作であるという理由で反切だけを『篆隸万象名義』から引用し、それ以外の注記を『玉篇』から引用している。これは、効率的検索の可能性を追求して編纂された字書として正統な処理ではない。全体を「佛、法、僧」の三部構成にして、「法」部の冒頭に「水」部を置き、「水」字のあとに「法」字をあげる編纂方式は、すぐれて仏教的である。

改編本も「佛、法、僧」の三部構成を踏襲しているが、観智院本では、「佛」部が「人」字で始まり、そのつぎに「佛」字をあげているのに対して、高山寺本では、「佛」字を最初に据えて、そのつぎに「人」字を置き、書名も『三寶類字集』と改めている。

7、原撰本にせよ改編本にせよ、『類聚名義抄』は、文字の音や意味を知るための字書としての機能が優先されていないから、実用に適していない。図書寮本では、中国で撰述された字書や音義の注がそれなりに役立つとしても、観智院本では羅列された多数の和訓の

なかからどれを選んでよいのか判断に迷う場合が少なくない。

「懷」字を例にとると、図書寮本と観智院本との和訓は、つぎのようになっている。

○図書寮本（すべての和訓に出典が示され、声点を加えられている）。

ナツク ハラム ヤスシ イダク イタル オモヒ キタス ムダク
ヨル ナツカシム スフトコロ オモフ フトコロニス

○観智院本（声点のある片仮名に傍線を加える。内容を理解せずに書写したことによる明白な誤写を訂正せずに引用する）。

ウ ヒ

ココロ イム ダク オモフ チカシ ヤスシ ナツク カヘル ナツ
ク ト ヌ ム

カシム ル フツコロニス カクル カネタリ イタイカナ キタス
マル ス

スツドム キタル イタル ハラム ハチ ム ツマシ シタカフ
ヨル ヤハラク（この和訓だけに合点がある）

観智院本の凡例に「片仮名有朱点者、皆有証拠、亦有師説」とあるから、原撰本系のテクストを尊重して改編されたとすれば、図書寮本に声点のある和訓には観智院本でも声点を加えられていることが期待されるが、ハラム、キタスに声点がなく、キタル（ス）に声点があるし、フトコロはフトコロニスに改められて声点がない。

観智院本の和訓の順序は図書寮本を継承しておらず、原則も秩序も認められない。改編本相互の比較が可能な「仏」部についてみると、高山寺本と観智院本との和訓の配列順序に出入りが目立つ。す

なくとも、その組み替えは漢和辞書としての機能を洗練しようとした結果ではない。さきに指摘したように、観智院本では、「水」字に「ミツ、カハ」の二訓をあげ、前者に声点を加えているが、実用的観点からすれば、「水」字をミツと訓むことに、証拠も師説も必要としない。ここまで見てくれば、「仏教界に辞書は在ったか」という問題提起の意味が理解できる。このタイトルは、思い込みや決めつけで研究を進めてはならないという著者の警告にはかならない。こういう基本的な問題が今ごろになって提起されたことは、遅きに失したとさえ言えるであろう。

図書寮本を原撰本（系）とよび、観智院本や高山寺本などを改編本（系）とよぶ習慣が定着しているが、そういうよびかたの背後には、前者をいっそう使いよく改編したのが後者であるという、証明されていない前提がある。著者は、そういう認識を否定し、前者を法相系『類聚名義抄』とよび、後者を真言系『類聚名義抄』とよんでいる。そして、改編の動機についても、法相宗に対して「真言勢力のレゾンデートルを内外に訴えようとしたのではないか。（略）図書寮本和訓の解体破壊を、一見そうとは見えないかたちで、実行した」という解釈を提示している（二二三頁）。紙幅の都合で極端に省略して引用したが、原著について、この点に関する著者の主張を確認されたい。仏教徒による著作である以上、字書も信仰と直接に結び付いているはずであり、文字は信仰の対象であったというのが著者の見解である。

8、国語史研究では、顕在する事実の収集整理に重きを置き、解

釈を軽視する風潮が濃厚であった。辞書史とよばれる領域も例外ではない。そのために、眼光が紙背にまでは徹しなかった。しかし、研究にとって大切なのは洞察である。解釈を目的としない事実の収集整理は研究と無縁である。その点において、本書は、これからの研究の方向を示唆していると評者は考える。

本書に提示された「新解釈」は、従来の共通理解との距離の大きさにおいて大胆であり、provocativeでさえある。このような解釈の可能性を想定した研究者はいなかったであろうから、その意味において、きわめてユニークであり、それだけに、頭の固い研究者には容易に受容しにくいであろう。しかし、著者の提起した問題にはんらかの説明が不可欠であることは確かであり、また、著者なりの筋立てのもとに一貫した説明がなされている以上、拒否するとしたら、それに代わるべきなんらかの説明を提示する必要がある。いかなる解釈も、よりよい解釈が提示されるまで有効である。

率直なところ、本書に提示された著者の解釈には、まだ、いくつかの大切な問題が積み残しになっていると筆者は考えるが、試論としても仮説としても、本書に代わるべき説明原理を提示することはできない。この「新解釈」を乗り越えて、いずれ、斬新な観点からいっそう説得的な「新々解釈」を提示するのは、ほかならぬ著者自身ではないかと密かに期待している。

〔笠間書院、一九九九年、一三九頁、四八〇〇円〕
（筑波大学名誉教授）